飯田龍太賞

（新作十五句）

朱夏の天

島根県　若林　恒子

ロープ持ち渡る吊橋夏の暁
万緑へ渓流の音鳴りわたる
岩を攀づしづかに汗を流しつつ
登山杖ひとつを恃むがれ場かな
鋭角も鈍角もよし遠青嶺

受賞のことば

山が好きで里山はもちろん、年に数回は峨々たる山にも登ります。どんな山にも四季折々の魅力がありますが、俳句と出会ってから、その楽しみはより深くなりました。自然の厳しさ、美しさに触れることで、多くのことを教えられる思いがします。

今回の作品は今夏、南アルプスの白峰三山を縦走した時のものです。大自然の与えてくれた感動を、率直に表現することに努めました。この度は思いがけず栄誉ある賞をいただき、感謝しております。これを励みとして更に精進したいと思います。ありがとうございました。

選にあたって

無理なく自然の山岳にいどむ心が描けている。季題の働きを一句々々の中で生かしている。登山の厳しさより少し安全な雰囲気が感じられるが、作者の置かれた位置から詠まれたからであろう。登山といっても安全な中で出会うことがらに焦点が置かれてあ

きつぱりと尖る北岳朱夏の天

名山に立ちて涼しき風の中

山小屋の一灯赤し夜の秋

哲人のごとき山容星涼し

雲上の径はひとすぢちんぐるま

岩ひばり人影追うて鳴きにけり

ことごとく天に開きてお花畑

逢ひたくて千島桔梗に逢ひにけり

縦走の空近々と夏帽子

雷鳥に会はずじまひの四日かな

り、それが案外魅力となっている。登山の楽しさを充分に味わって出来た句群。

（稲畑　汀子）

作者の登った山がなんという名の山であるのかは書かれていない。〈名山に立ちて涼しき風の中〉から「北岳」を目の当たりにした山であることがわかるが、そのような詮索は不要である。どの一句をぬき出してみても独立一句としての力があり、たんなる登山記録として連ねた作品ではないところに「朱夏の天」の群作の力がある。〈哲人のごとき山容星涼し〉〈ことごとく天に開きてお花畑〉などが印象に残った。

（宇多喜代子）

第一次選考通過作品に目を通して、よい句に印をつけたところ、「朱夏の天」では〈ことごとく天に開きてお花畑〉〈きつぱりと尖る北岳朱夏の天〉〈鋭角も鈍角もよし遠青嶺〉など六句あった。第一句はお花畑を、この世のものと言えぬほど美しいと見た。第二、三句の山容のとらえ方など、岳人らしい独自の発想と力強い表現で、一句一句を揺るぎなくまとめていた。

（鷹羽　狩行）

稲畑　汀子選

選者賞　一つ

埼玉県　内藤　正人

墨一字朱印一つの一賀状
笛一管祭囃子の初稽古
どんど焼一気に燃ゆるものばかり
花よりも一足先の桜餅
満月は一夜かぎりぞ山桜
掌の内に一点ともる恋蛍
一心の螺子ゆるみゆく昼寝かな
囮鮎一人一竿放ちけり
一生に一死ありけり盆の月
一の目が赤きさいころ生身魂
瀑一つ色なき風に染まりけり
割箸を裂く音一つ秋の風
一夜あけ感極まりぬ曼珠沙華
毛糸編む一目一目に命あり
鐘一打合掌一つ年一夜

選評

一つという題にいささか固執した感がないことはないが、その点充分心遣いが感じられるのがよかった。十五句を纏めて見ると「一」が少々気にかかるが、一句々々を見ると気にならないのは、作者の配慮が込められているからと見た。ある意味で努力賞とも言える作品群である。

（稲畑　汀子）

宇多喜代子 選

選者賞　上野界隈

千葉県　杉澤いづみ

地下駅を出て花の山人の山
隣り合ふ神に仏に花吹雪
遠足の列を切つては人通す
甘味屋へ信号を待つ夕薄暑
著莪咲くや観音堂の懸け造り
由来書あれば佇み夏帽子
楽団のバスの来てゐる蟬しぐれ
禽獣の匂ひに日傘重くなる
獣よりも人のふためく夕立かな
どの径を来ても噴水目に耳に
汗ぬぐふロダンの地獄門の前
寺町の塀の全長ちちろ鳴く
爽やかや大鯨像反り身して
子規記念球場銀杏落葉舞ふ
飛行船ぬつと上野の小春空

選評

山川の景や故郷懐古の句のおおい中にあって、ひとの動き、ひとの仕種、素描的気分などの伝わる「上野界隈」に親しみを感じた。ひとの多い春から、落葉の秋までの「上野」風景の一句一句に気負いがなく、「上野」を知らぬひとにも伝わる句ばかり。ただ〈飛行船ぬつと上野の小春空〉は「空小春」でよかったのでは、そんなことを思いつつ、選者賞に推した。〈甘味屋に信号を待つ夕薄暑〉〈どの径を来ても噴水目に耳に〉など、いかにも上野だと思わせる。

（宇多喜代子）

鷹羽　狩行選

選者賞　家族

広島県　田村祐巳子

恋猫を恋を知らざる子が宥め
嘘とすぐ分かる子の嘘さくらんぼ
眠られぬ夜をともにして水中花
街に出てほどなく馴染み更衣
日曜は母に戻りぬ夏帽子
留学の子の部屋に寝て明易し
形代や家族の名前ひとつ増え
赤子より大きな荷物さげ帰省
うすら寒滞りなく人葬り
公園で機嫌を直し七五三
北窓閉づ隣の犬のよく吠えて
マフラーの巻き方を変へ子の帰宅
聖樹の灯途絶えてやがて我が家の灯
歳晩やありしところに物戻し
もう一度猫を抱きしめ受験生

選評

よいと思った句は〈嘘とすぐ分かる子の嘘さくらんぼ〉〈日曜は母に戻りぬ夏帽子〉〈留学の子の部屋に寝て明易し〉〈公園で機嫌を直し七五三〉など九句で、「朱夏の天」よりも多かった。それぞれ家族――とくに昭和の家族の暖かい感じがよく出ていた。回想句かも知れない。「朱夏の天」と言い、この「家族」と言い、この賞の応募作品の幅が広いことを、今回も思ったことである。

（鷹羽　狩行）